慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会科学方法論における初期ゴットルとマックス・ヴェーバー
Sub Title	Zum wirkungsgechichtlichen Verhältnis zwischen Friedrich Gottls Frühschriften und Max Webers Wissenschaftslehre. Verstehen, Begriffsbildung, und Alltagskenntnisse
Author	森川, 剛光(Morikawa, Takemitsu)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1998
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.90, No.4 (1998. 1) ,p.829(135)- 848(154)
JaLC DOI	10.14991/001.19980101-0135
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19980101-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」90巻4号（1998年1月）

社会科学方法論における初期ゴットルとマックス・ヴェーバー[(1)(2)]

森　川　剛　光

1.　問題の所在

ゴットルは今日では，ナチスのイデオローグの経済学者とみなされ，彼の経済学説は非合理なロマン主義の残滓とされ，真剣に取り上げるに値しないものとみなされ，今日までドイツにおいても日本においても十分な検討が加えられているとはいいがたい。とりわけ，彼に批判を加えるにしても外在的なものにとどまり，彼の出発点となった初期の著作までさかのぼり，彼の初期の問題意識を明確にし，そこからの内的発展をあとづけ，内在的理解に立脚した批判というものはほとんどなされていない[(3)]。

（1）　本稿は社会思想史学会第21回大会における自由論題報告「社会科学方法論におけるヴェーバーとゴットル」の報告原稿に加筆したものである。なお，本稿作成にあたり，寺尾誠名誉教授，飯田裕康教授，池田幸弘助教授，小樽商科大学松家仁助教授，佐藤有史氏，久保真氏から貴重なコメントと助言を頂いた。この場を借りて謝意を表したい。なお本稿における誤りは全て筆者の責任である。

（2）　バックは，ゴットルの議論を三つの時期に区別している（Back, J., *Der Streit um die nationalöknomishe Wertlehre, mit besonderer Berucksichtgung Gottls*, Jena 1926, S. 96-100.)。第一期は『歴史の限界』Grenzen der Geschichte までであり，この時期にはディルタイ，マッハ，ミュンスターベルクの影響を受け，行為科学（歴史学と国民経済学）と自然科学の相違をその素材の存在論的相違に求めていた。第二期は，「社会科学的概念構成に寄せて」から「言葉からの解放」以前までであり，ヴェーバーとのからみで述べるならば，「ロッシャーとクニース」におけるヴェーバーのゴットルに対する批判から，ヴェーバーの死までの期間である。この時期には素材の相違のみならず，概念構成上の相違，認識主観の現実に対する態度の取り方の相違をゴットルは認め，リッケルトやヴィンデルバント，ヴェーバーの影響が強くなる。第三期は「言葉からの解放」以降，即ちヴェーバーの死以降であり，第一期・第二期においては特別な経済理論はなく，歴史学と国民経済学のみが日常を対象とする経験科学であり，政治学や社会学にはそのような地位は認められていなかったのに対し，第三期では国民経済学は全経済学という特殊な学科と特徴づけられ，政治学や社会学も国民経済学とならぶ人間生活の経験科学として認められるようになる。本稿では，このバックの区分を踏襲して，『価値思想』，『言葉の支配』，『歴史の限界』の三作を初期ゴットルとして議論することにする。

しかしこのような戦後のゴットル理解の一方でまた，誰よりもマックス・ヴェーバーが同時代人として，ゴットルを高く評価していたことを忘れてはならない。「理解社会学の若干のカテゴリーについて」にも，「社会学の根本概念」でも方法についてはゴットルの『言葉の支配』[4]を参照するように求めている。また「ロッシャー論文」の冒頭でもゴットルに触れ高く評価している。そうすると近代社会学の創始者の一人とみなされるヴェーバーがいかなる意味で，「非合理で前近代的なロマン主義者」ゴットルを評価していたのかという問いが立てられよう。このような問いは上で述べたような通俗的なゴットル理解とヴェーバー理解にとどまる限り答えられないものである。さらに歴史学派の末裔としてのゴットルというゴットル理解では，ゴットルとオーストリア学派の関係が理解できなくなる。少なくともヴェーバーのゴットル理解に従っても，ゴットルの自己理解に従っても，初期ゴットルの試みは，オーストリア学派の延長に考えられるものであっても，対立するものとは考えられていない[5]。

テンブルックは今からすでに30年以上まえに，マックス・ヴェーバーの方法論の生成において，ゴットルが非常に重要な役割を果たしたという事を指摘している[6]。それにも係わらず，今日に至るまで，ヴェーバーとゴットルの関係をさらに掘り下げた研究は出ていない。例えば，最近の研究書である『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』や『マックス・ヴェーバーの科学論』におい

---

(3) 例えば，福井孝治『経済学の基礎にあるもの』東京出版，1958年，294頁以下。最近のものでは，Woll,H., *Die Wirtschaftslehre des deutschen Faschismus*, München, Wien 1988, S. 71ff.
戦前戦中の日本におけるゴットル受容については，早坂忠「戦時期の経済学」経済学史学会編『日本の経済学――日本人の経済的思惟の軌跡――』東洋経済新報社，1984年及び酒技義旗「ゴットル経済学研究序―其の一わが国経済学界との関係について」『早稲田大学政治経済学雑誌』第103号，1950年を見よ。

(4) Gottl, Fr., *Herrschaft des Wortes*, Jena 1901. 後の『生としての経済：認識批判論集』にも収められている。Gottl-Ottlilienfeld, Fr. v., *Wirtschaft als Leben,* S.79-335, Jena 1925.

(5) Weber, M., *Gesammelte Aufsätze zur Wisssenschaftslehre*, 3. Aufl. hrsg. von J. Winckelmann, Tübingen 1968, S.117, Anm. 2.（邦訳「ロッシャー」242頁。以下 WL と略す。略号のあとの数字は原則としてページ数。邦訳文献は以下のように略し，対応頁を示した。また引用する場合，訳文は適宜直しており，訳書とは必ずしも一致はしない。「ロッシャー」＝松井秀親訳『ロッシャーとクニース』未来社，1988年：「客観性」＝祇園寺信彦・祇園寺則夫訳『社会科学の方法』講談社学術文庫，1994年：「マイヤー」＝森岡弘通訳「文化科学の論理学の領域における批判的研究」『歴史は科学か』みすず書房，1965年：「シュタムラー」＝「R・シュタムラーにおける唯物史観の「克服」」『ウェーバー　宗教・社会論集』世界の大思想 II-7，河出書房新社，1968年；「根本概念」＝清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波文庫，1972年），Gottl (1901), S.223 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 240. なお，シュモラーもまたゴットルを「オーストリア学派の経済学者」と呼んでいる。Schmoller, G., Die Volkswirtschaft, die Volkswirtschaftslehre und ihre Methode, in : *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 1893, 3. Aufl., 1911, S. 450.（戸田訳『国民経済，国民経済学及び方法』有斐閣，62頁）

(6) Tenbruck, F.H., Die Genesis der Methodlogie Max Webers, in : *Kölner Zeitschrift fur Soziologie und Sozialpsychologie*, 11. Jahrgang, 1959.（住谷一彦・山田正範訳『マックス・ヴェーバー方法論の生成』未来社，1985年。）

ても，ゴットルに言及している論文は，私の確認した限り，ない。[7] このヴェーバーが言及している『言葉の支配』という著作は，初期ゴットルの代表作であり，ゴットル自身が彼の学的営為の出発点となったと後に述べている重要な著作である。[8] そこで本稿では，『言葉の支配』を中心とした初期ゴットルの問題設定を探求し，その限りで，ヴェーバーとの関係を考察してみたい。そして当時の精神史的状況をスケッチすることで，本論にはいる前の準備作業としたい。

19世紀最後の10年間の思想史的状況は実証主義への反逆と特徴づけられる。[9] もちろん実証主義をどう規定するかも問題になるが，ここではとりあえず，本稿の目的にあわせて以下のように規定することにする。まず第一に感覚知覚を認識の唯一の源泉とする態度。例えば，それに従うならば，1や3といった数も1個の石や3個のパン等の具体的存在者から一般化されたものであるとみなされる。論理学の諸法則も同様に現実の経験から得られたものとされる。また，この場合の経験は感覚知覚の単なる総和とみなされる。従って，このような実証主義は次のように現実と概念の関係を

---

(7) Mommsen, Wolfgang J. und Wolfgang Schwentker, Hrsg., *Max Weber und seine Zeitgenossen*, Göttingen 1987.（鈴木・米沢・嘉目訳『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』ミネルヴァ書房，1994年。）; Wagner, Gerhard und Heinz Zipprian, Hrsg., *Max Webers Wissenschaftslehre*, Ffm 1994.

例外的にヘニスが Hennis, W., *Max Webers Fragestellung. Studien zur Biographie des Werks*, Tübingen 1987（雀部幸隆他訳『マックス・ヴェーバーの問題設定』恒星社厚生閣，1991年）; ders., *Max Webers Wissenschaft vom Menschen*, Tübingen 1996. の脚注でゴットルに言及している。加藤明彦の著作（『社会科学方法論序説 —— M. ウェーバーと F.v. ゴットル ——』風間書房，1991年）は，邦語文献では，ゴットルに内在した唯一の本格的研究書であるが，筆者の観点からは次のような不満が残る。第一に，ゴットルとヴェーバーの共通点よりも相違点を強調し（例外は同書第一章），その際ヴェーバーを近代合理主義の代表者として捉えているため，なぜヴェーバーがゴットルを高く評価しているのかが不明のままである。第二に，ゴットルの独創性を高く評価するあまり，他の思想家・科学者とゴットルとの継承関係も不鮮明なままであるように思われる。例えば，ヴェーバーはゴットルはその議論をマッハ，ディルタイやミュンスターベルク，ヴントの影響のもとに展開していると指摘しているが，氏の著作を読む限り，この関係も不明のままにとどまっている（WL, 3, Anm. 2.（「ロッシャー」13頁）参照。なおミュンスターベルクとの関係は「ロッシャーとクニース」の論述に即した限りではあるが，奥田隆男が「「ロッシャーとクニース」における理解論」（『社会思想史研究』第10号，北樹出版，1986年）において指摘している。また，八木紀一郎は，「行為」の発見という点で，ゴットルのヴェーバーに対する影響を評価している（八木紀一郎『オーストリア経済思想史研究』名古屋大学出版会，1988年））。第三に経済学における歴史主義＝歴史学派，自然主義＝限界効用学派という整理の仕方も，最近のシュモラー研究やヘニスのヴェーバー研究を読むならば，不満が残るところであるし，ゴットルのオーストリア学派理解や，ヴェーバーのゴットル理解とも不整合が生じるように思われる。最後に，解釈学的転回以後の英米哲学を含めた現代思想（後期ヴィトゲンシュタインやガーダマー）の議論を視野に収めていないために，ゴットルがかなり現代的な議論をしていると積極的に位置づける契機が不十分である。

しかしながら，ゴットルの難解な諸著作を明瞭な形にまとめながら，現代の科学主義批判・合理主義批判へと展開していく，加藤氏の問題意識には筆者も大いに共鳴するところであり，本稿自体が氏の著作がなければあり得なかったことをここにつけ加えておく。

(8) Gottl-Ottlilienfeld, Fr. v., *Wirtschaft als Leben*, Jena 1925, S.XIX.

理解していた。即ち，概念は全て経験から得られるが，その経験は単なる感覚知覚の総和であり，なんらの意味的なまとまりもない，故に純粋観察が可能である。第二に，自然科学の方法や概念構成の社会科学に対する適用。その際，両科学の対象の質的相違はないとされる。(もちろん当時の自然科学に対する理解に基づくものであり，今日の水準での自然科学理解に基づくものでないことはいうまでもない)。その際には，科学の手続きは以下のような手順に従うものとされる。①素材の蒐集＝観察②帰納による仮説の構成③仮説に基づいた事実の予測④実験とその結果による仮説の検証。ここでは観察と理論の厳密な分離が要請される。

次ぎに概念実在論の拒否と唯名論の勝利があげられる。概念はなんら実体性を有するものではなく，類似性をもつ対象に適用される名称にすぎないものとされる。(しかし，同時に，このようにして

---

(9) 19世紀最後の10年間の思想史的状況を実証主義への反逆と規定したのは，ヒューズであり，本稿でもおおむねそのフレームワークを採用している。しかし，彼はドイツにおいてはフランスやイタリア流の実証主義はなかったという著しい事実誤認をしている。そして彼はドイツ歴史学派経済学を「一種の潜在的マルクス主義と，一部はランケに由来する人間共同体の「精神」に関するロマン主義的観念との奇妙な混合物」と述べている。Hughes, H.S., *Consciousness and Society*, New York 1958, p.303. (生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房，1970年，206頁上段)。そして彼は「ロッシャーとクニース」におけるヴェーバーの議論を次のように要約している。

「ロッシャーとクニースとは，方法論的精密さを必要とする分析の中に，実際にはひそかに価値的要素を持ち込んでいた。個人的精神的実体を暗に承認することにより，彼らは正確な歴史研究の伝統と，価値と抽象を扱う観念論的社会思想の他の一分枝とつなぎ合わせてしまったのである。そしてこの方法上の混乱を，彼らは，人間の世界は自然の世界と根本的に異なるものだという例の使い古した議論によって正当化しようとした」Ibid. (同下段)。

このようなドイツ歴史学派経済学の理解はシュモラーら後期歴史学派の実証主義的経済史研究の膨大なモノグラフをまったく無視しており，あたかもヴェーバーがロッシャーやクニースを直接の批判対象としていたかのようである。これに対してテンブルックは次のように批判している。「これまでの所，そして最近でも繰り返されているが，ヴェーバーについての文献あるいは彼の論文集において，彼の社会学に対する貢献が，あたかも彼が（民族精神等のような）ロマン学派の諸表象を一掃したことであるかのように述べられているのは，悲しむべき，いやそれどころか恥ずべき事実である。それは「精神史的発展」における一つに無知を示している。ヴェーバーの時代には，すでにそのような表象はとっくに廃れていたのである。それに代わって現れたデイルタイやジンメルにおける社会的相互関係の思想はしばらくおくとしても。この種の賞賛はヴェーバーのテクストを憂慮すべき軽率さで扱っていることを示してもいる。というのは，ヴェーバー自身がロッシャー論文で，彼の歴史学派との取り組みは，そのすでに時代遅れになった（！）具体的な諸見解ではなく，概念と現実の方法論的構想についてにあるのである，と十分明らかにしているからである」(下線部は原文はイタリック体)。Tenbruck(1959), Anm. 17. (邦訳129頁，原註17)

事実，ヴェーバー自身はロッシャー論文の冒頭で次のように述べている。「我々はここで，ずっと以前に克服されたロッシャーの見解を（強調筆者），その論理的性格に結びつけて詳細に分析する。その実質的な内容については，今日の我々の科学においてはおそらくもはや誰も，贅言を要さぬ事であろう。しかしながら，この理由から，その中に潜んでいる論理的弱点が我々には（強調筆者），ロッシャーにとってそうであったよりも，一般的に明瞭なものになっていると考えるならば，それは誤りであろう。」WL, 3.Anm. 1. (「ロッシャー」11-2頁)。

得られた概念や法則は究極においては，レアールなものに還元可能であり，それが故に，それ自体もレアールな存在者という事ができる。別のいいかたでいえば，正しい理論においては，理論言語と観察言語の一義的な対応付けが可能であるとみなされる[10]。

このように実証主義の規定をし，ヴェーバー及びゴットルの周辺を見回すならば，シュモラーの名前が浮かんでくる[11]。これまでのところ，ヴェーバー及びメンガーの論敵としてのみシュモラーの名前は語られてきた。しかし，その際，ヴェーバーを近代社会学の創始者の一人にして近代主義者，メンガーを近代経済学の祖の一人とすることで，シュモラーは倫理的経済学の主張者にして数学的方法及び理論研究の否認者と語られ，正当に評価されてはこなかった。しかし彼自身は経済学の方法を，当時の人々が理解した意味で，自然科学の方法と同一視したし，経済史研究を将来の概念構築，理論構築のための素材の蒐集とみなしたし，概念実在論のような理念的なものの自律性や固有法則性を厳しく拒絶し，唯名論の立場に立っていた[12]。

ここでは理論研究と歴史研究は存在論的に同一平面上に立つことになる[13]。これらの意味でシュモラーをドイツにおける実証主義者とみなすことが出来る。

---

(10) この点については，Cassirer, E., *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*, Berlin 1923, S. 256（山本義隆訳『実体概念と関数概念』みすず書房，1979年，221頁）．参照。

(11) 筆者のシュモラー理解はもっぱら，Hansen, R., Der Methodenstreit in den Sozialwissenschaften Gustav Schmoller und Carl Menger, in : *Beiträge zur Entwicklung der Wissenschaftstheorie im 19. Jahrhundert*, hrsg. v. A. Diemer, Meisenheim am Glan 1968. 及び田村信一『グスタフ・シュモラー研究』御茶ノ水書房，1993年によっている。

(12) 経済学における歴史と理論の関係をシュモラーがどう理解していたかについては，Schmoller,G., Zur Methodologie der Staats-und Sozialwissenschaften, in: *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, N.F. Jg. 7, 1883, S. 241-3.（吉田昇三訳「国家科学・社会科学の方法論のために」（抄訳），278-281頁。メンガー『経済学の方法』日本経済評論社，1986年所収）。歴史派経済学の歴史研究が一般理論のための準備であるという理解については，Schmoller(1911), S. 458, 459.（戸田訳）84-5頁，87頁）。概念構成については，Schmoller(1911), S. 465, 466, 467.（戸田訳103，105，107頁）。ちなみに歴史研究あるいは記述的科学が単なる素材集めだということに対するヴェーバーの反論は，例えば，WL, 216-7.（「マイヤー」103頁）に見られる。

唯名論，自然科学への定位，検証可能性等の科学理解のほとんどをシュモラーはジョン・スチュアート・ミルの『論理学』から受け取っていた(Hansen (1968), S.150ff.)。ミルの『論理学』は，すでに1850年前後に，思弁的な自然哲学にかわり，科学論・科学方法論として参照されるようになり，1849年にはドイツで最初の5編のドイツ語訳が出版され，1865年には全6編の完訳がなされた(Hansen(1968), S.144ff.)。

ミルの『論理学』のついてはとりあえず，Schumperter, J.A., *History of Economic Analysis*, London 1954, pp. 449-452.（東畑精一訳『経済分析の歴史』第三分冊，岩波書店，1957年，948-954頁）を見よ。本稿との関係ではとりわけ，Winch, P., *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, London 1958, chap. 3.（森川真規雄訳『社会科学の理念』新曜社，1977年，第3章）を見よ。

(13) Vgl.WL, 195.（「客観性」118頁）。

2．価値思想から根本概念をめぐる争いへ

『価値思想』はゴットルが博士論文として執筆したもので，1897年に出版された。[14] 当時のドイツ語圏の経済学界では，価値論をめぐる議論が盛んで，経済学者たらんとするものは，自分なりの価値理論を完成させることによってはじめて，経済学者として一人前と認められることになった。そこでゴットルも自分なりの価値理論，即ち「価値とは何であるか」に対する解答を追求していた。しかし，そのうちにそもそも価値とは何であるかという問題設定自体が誤りではないかと考えるに至る。[15]

当時「価値」概念は，一方では，経済学にとって隅の首石となるべき重要な概念であるとされながら，他方では「価値」に対する統一された見解はなく，議論百出・百家争鳴の状態であり，それぞれの理論家がそれぞれ自分なりの価値理論を主張し，それらが互いに整合しない，という状態にあった。これでは国民経済学全体がいわば砂上の楼閣であるといってもしかたないことである。新たな価値理論をつくろうとすると，どうしても，これまでの価値理論とは矛盾せざるを得ないし，また価値概念自体がそれぞれの価値理論ごとに意味がずれてくるので，他の理論の論破はできなくなる。つまり，それぞれの内的整合性を備えた理論同士が互いに相争うという事態となる。個々の理論家はこの価値論の混沌とした状態が，自分の学説の勝利によって，克服されると考えているが，それは単なる希望であり，根拠はなく，また，この価値論の状態に対する批判を鈍らせてしまう。このひどい状態が一時的だと考えているのは単なる迷信である，とゴットルはいう。[16]

ゴットルは当時のそれぞれの理論家の価値理論を検討することにより，そこにおける議論されない暗黙の前提を暴き出し，それを「価値思想」Wertgedanke と名付ける。それは以下のように定式化される。[17]

「「価値」という言語記号のもとに，誰にとっても同一なものとして処理される，一つの対象が科学に前もって措定されている」という思想，

手短に言えば，

「「価値」という名称のもとに科学にとって単一の客体が前もって措定されている」という思想のことである。

---

(14) Gottl, Fr., *Wertgedanke,* Jena 1897. これも後に『生としての経済』に収録されている。Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 1-75.

(15) Gottl (1897), S.14. Anm. 1 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 15, Anm. 1; ders., *Wirtschaftspolitik und Theorie*, Berlin 1939, S. 235ff.

(16) Gottl (1897), S. 2-10 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 4-11.

(17) Gottl (1897), S. 22 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 22.

このような鋭い問題提起にもかかわらず，『価値思想』は中途半端な印象を与える。というのは，ゴットル自身はこの著作の中では，価値思想が妥当するかどうかについての検討を行っていないからである。ただ，価値思想を離れない限り，価値論内部における混乱状態は収まらないことを示唆するのみである。

『価値思想』に続くゴットルの著作である『言葉の支配』の第一論文である「国民経済学の根本概念について」[18]では，考察の対象が価値概念のみならず根本概念一般に拡大されている。当時のドイツ語圏の経済学では，「根本概念をめぐる争い」が存在していた[19]。つまり，経済学の根本概念については，各論者がそれぞれ別々のことをいっており，しかもそこには統一された見解が見られない[20]。そして重要な概念であればあるほどそうであった。そして，著作の最初で根本概念について論ずることが，当時のマナーであった。「価値」概念をめぐる争いはこの「根本概念をめぐる争い」を代表していたのである。この考察範囲の拡大と同時に，問題のたて方にも微妙にずれがある。つまり，ゴットルは「価値」なるものがそもそも存在するか，いいかえれば「価値思想」は妥当するか，と問いをたてるのではなく，「価値」概念を含めた根本概念を国民経済学において使用するように強制しているのはいかなる事情であるのか，「価値思想」を含む「X 思想」は如何に発生して来たのかと問題をたてるからである。

国民経済学ではしばしば根本概念について語られる。では，そもそも，「根本概念」とは何であろうか。根本概念の名称で何が思念されているのあろうか。これに対して，国民経済学の根本概念とは，例えば，「財」，「資本」，「価値」，「富」，「経済」といったようなものだ，そして，思念されているのは，財であり，資本であり，価値であり，富であり，経済である，と答えることもできよう。しかしこのような，列挙は単なる言い逃れのように思える，とゴットルはいう[21]。何が国民経済学の概念として列挙され，何が列挙されないかについての，大まかなまとまりは，存在している[22]。しかし，それらの概念が何を意味するかは，それぞれの論者の個人的見解に任されてしまう。

---

(18) これはゴットルの教授資格請求論文として執筆された。ゴットルはもともとカール・クニースの弟子であり，マックス・ヴェーバーがハイデルベルク大学のクニースの講座を引き継いだために，ゴットルは当初ヴェーバーのもとで教授資格をとる予定であった。しかし，ヴェーバーが病気療養をやむなくされたために，ラートゲンのもとで教授資格をとることになった。*Max Weber-Gesamtausgabe*, II/5, S.293.

(19) 「根本概念をめぐる争い」についてはヴェーバーも，WL, 160-161, 202.（「客観性」42，133頁）で触れている。Vgl.auch WL,196（「客観性」119頁）．また，この「根本概念をめぐる争い」及び「言葉の支配」とヴェーバーの関係については，Hennis,W., *Max Webers Fragestellung. Studien zur Biographie des Werks*, Tübingen 1987, S. 9, Anm. 14, S. 147.（雀部幸隆訳『マックス・ヴェーバーの問題設定』恒星社厚生閣，1991年，56頁，174-5頁）を見よ。

(20) Gottl (1901), S. 6 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 88.

(21) Gottl (1901), S. 7 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 89.

(22) Gottl (1901), S. 10 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 91-2.

それにもかかわらず，特定の言葉は国民経済学の中でも特定の役割を占め，多用されている。これらの言葉は国民経済学の成立時に，日常語から特に正当化されることなくとってこられた。[23] 国民経済学はその端緒から，日常の意味において，日常について研究し，追思惟する学問であった。そして，国民経済学の成立時――ここではスミスと『国富論』の成立が念頭に置かれているが――においてはまさにそうであり，そこでは日常の言葉を用いて，日常の問題関心に従って，日常の事態が叙述されたのであった。[24] その際に多くの日常語が国民経済学の用語として採用された。これらの言葉をゴットルは原専門表現 Eingeborene Fachausdrücke と呼ぶ。[25]

こうして採用された原専門表現は当初は無害であった。[26] なぜならば，日常の体験された連関において用いられたからである。その場合，同一の言葉は連関＝コンテクストによって様々に用いられた。しかしながら，これらの言葉は同時に，国民経済学の体系化の契機ともなった。[27] そして現実の諸連関から独立して，これらの言葉が常に何らかの同一の X を表すという信用を得たとき，思惟は言葉に捕らわれ，「言葉の支配」が始まり，「価値」「資本」「利子」「労働」等々を国民経済学の対象として研究し始めるのである。[28] そこでは単なる言葉が概念を僭称している。[29] なぜなら，言葉が意味を持つのは日常の意味連関においてであるからである。また，それと同時に，国民経済学はその統一性を失い，「価値論」，「資本論」，「利子論」等々に分裂する。なぜなら，「価値」や「資本」や「利子」といった言葉をまとめて，互いに関連づけていたのは日常の意味連関だったのであるから。

「言葉の支配」に陥った国民経済学の孤立化された諸カテゴリーが意味と機能を受け取るのは，ただ「日常」という構造ないし体系の内部の要素としてのみである。繰り返すならば，これこそがゴットルの洞察であった。[30]

3．行為の世界の特徴

今述べたようにゴットルは根本概念の批判という形で「日常」という発想に到着した。次ぎにゴットルはこの「日常」をどのように捉えているか少し彼のいうところをまとめて述べてみたいと思う。

ゴットルは何よりも「日常」という言葉で，日常の「行為」とその前提である「日常知」とそれ

---

(23) Gottl (1901), S. 16; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 97.
(24) Gottl (1901), S. 45; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 129-30.
(25) Gottl (1901), S. 16; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 97.
(26) Gottl (1901), S. 39f; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 123.
(27) Gottl (1901), S. 41; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 124.
(28) Vgl. Gottl (1901), S. 49ff; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 134ff.
(29) Vgl. Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 630.
(30) Vgl. Gottl (1901), S. 165; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 317.

らからなる日常の「行為の世界」を考えていた。この行為の世界は主として物理学の対象となる外的自然とも，また主として心理学の対象となる内的自然とも区別される，独自な第三の世界である。それは意味の世界であり，物理的ないしは心的現象として相対するならば直ちに死んだ部分へと分解してしまう。つまり，行為の世界の生起を表現する言語は物理学の言語にも心理学の言語にも還元不可能であるということである。[31] この行為の世界で人間は行為し，受忍する。行為の世界は行為の所為（Handlung, Tat）から成り立っている。[32] ただし，行為の世界の生起は無秩序に生じるものではなく，連関において生起する。つまりなされた行為は所為として後続の行為を規定し，更にその行為も所為として更に後続の行為を規定する。この意味で，所為は体験された連関の要素であり，[33] 体験された連関は同時に行為の連関として逆に行為を規制する。また自然物も有意味なものとして行為の世界に進入することもあり，その場合には行為の連鎖を規定する。体験はこの行為という生起の連関からのみ理解できる。そしてこれらの連関は行為の世界では網の目のように絡み合っており，我々独自の行為の範型に従って理解できる。[34] ここではこの行為の範型が目的論的構造を持っているということに注意しなければならない。[35] この目的行為の連鎖の連関のことを特にゴットルは志向連関と呼ぶ。[36] また，体験された生起はそれが体験されたのと同様に思惟することが出来る。[37]

行為の世界について思惟に与えられている知識が日常知である。これは我々が行為できるという事実の中にすでに含まれており，――即ち行為の前提となる知識であり――，しかし固定されたものではなく，またどこからか天下ってきたものでもなく，我々の行為のみにより生成したものである。日常知は行為や思惟の前提であると同時に，行為から生成した知である。従って行為の世界の存在はいわば，日常知として，行為の前提となっている。この意味で思惟と行為は結びついている。

---

(31) Gottl (1901), S. 70, 77-8 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 154, 161-2.後のゴットルの例（Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 525ff.）を用いるならば，A「読者はこの行を読んでいる。という言明は，B「読者の眼は印刷の文字と関係して，文字が次々に視点を通過するいうに動いている」という言明やC「読者の意識の中では文字の継起的な知覚が表象の推移に伴われている」という言明には還元不可能であるし，言明Aを理解することは言明BやCに還元することではないということである。つまり「読む」という「体験」は単なる物理的ないし心理的運動以上の何物かなのである。なおヴェーバーも，理解社会学や限界効用理論は心理学とは何の関係もないとしばしば明言しており，次のようにもいっている。「誤りは，「物理的」でないものは「心理的」であるという，心理的なもの」という概念にある」（WL, 559.（「根本概念」31頁））。またこの点については加藤（1991），18頁以下を参照。

(32) Gottl (1901), S. 116 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 252.

(33) Gottl (1901), S. 184 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 197.

(34) Gottl (1901), S. 70-1 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 154.

(35) Gottl (1901), S. 109,184f. ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 243, 197f. Vgl. auch Gottl (1901), S. 76-7, 97, 140, 203f ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 160-1, 181, 283, 219f.

(36) Gottl (1901), S. 78, 82-3, 98, 116, 162, 168, 184f., 188ff., ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 162f., 166, 181, 197f., 201ff., 253, 313, 321.

(37) Gottl (1901)., S. 128 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 269.

またこの日常知が言語コミュニケーションを可能にする。[38]

自然科学の対象となる意味での「自然」――認識し行為する主体から切り離された客体存在としての「自然」，人間にあらかじめあるもののように現れる「自然」――が人間の創作であるのに対し，[39]行為の世界はそうではなく――認識し行為する主体とともに――端的に与えられるもの das schlechthin Gegebene である。[40]また自然が対象的に概念把握されるものであるの対し，行為の世界は［感情移入的に］理解されるものである。つまり自然現象間の因果連関が，現象をよりよく説明するために研究主体が創作したフィクションであるのに対し，行為の世界の生起の連関は行為の連関・体験の連関として，少なくとも研究主体とは独立して，また研究主体から独立した当該の行為主体により思念されている。その意味で，行為の世界を正当に取り扱う学問の研究主体及びその前学問的形態である行為の世界に帰属する日常行為の理解主体にとって，理解される対象の秩序は，研究主体や観察主体によって賦与される法則や図式とは異なったそれ固有の秩序を有するといえる。

そしてゴットルによれば行為の世界を経験科学的に取り扱うには二とおりの仕方があるという。つまり所為から所為へと時系列的に認識するか，所為と所為の構造化された相互規定関係として認識するかのいずれかである。前者が歴史学であり，後者が国民経済学である。[41]

4．「事実の前の理論」と理念型

すでに述べたような日常知と行為の世界の連関を前提として，ゴットルは「事実の前の理論」Theorie vor den Tatsachen という議論を展開する。当時の経済学における「理論的研究」と「歴史的研究」の対立がこの議論の前提になっている。この対立は方法論争にもかかわらず，架橋されずに残ってしまった。[42]

すでに見たように，価値とは何か，富とは何か，経済とは何かというような問いのたてかたをゴットルは「言葉の支配」として批判していた。これに対して，ゴットルは国民経済学をあらゆる時代の日常生活の経験科学と特徴づけ，個性的な現実を把握すること，つまり事実を研究することをその課題としている。[43]その意味で，ゴットルはリカードゥの抽象的理論に対する歴史学派の批判の意義を高く評価している。[44]しかしその際問題になるのが研究主体の日常拘束的性格の忘却とそれに基づく――シュモラーに代表される――唯名論的概念構成である。本論の冒頭で指摘しておいたよ

(38) Gottl (1901), S. 72-4 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 156-8.
(39) Gottl (1901), S. 80, 86, 125 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 160f., 169, 263-4.
(40) Gottl (1901), S. 80, 86, 125 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 160f., 169, 263-4.
(41) Gottl (1901), S. 70, 135ff. ; Gottl-Ottlilienfeld(1925), S. 154, 277ff.
(42) この理論的研究と歴史的―経験的研究の間の「架橋できない溝」については，例えば，WL,161, 187.（「客観性」42，99-100頁）を見よ。
(43) Gottl (1901), S. 221 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 239.

うに，シュモラーはミルの論理学に基づいて，十分な歴史研究により素材が蒐集された後に，はじめてそれらから共通のメルクマールを取り出すことによって，概念が構成され，理論が構築されると想定していた。そしてその際，性急な概念構成や理論構築は慎むべきであり，十分な資料が蒐集されるまでは虚心坦懐に事実そのものにあたるべきであると考えていた。ここでは無色透明で「没価値的」な研究主体が読みとれる。つまり，シュモラーのあるいはミルが想定している研究主体は，行為の世界に拘束されていない，あるいはたとえ拘束されていたとしても，そこから完全に解放されることが出来ると考えられている(近代的主体)。しかし，ゴットルは経済学の研究及び認識行為をそうではないと理解した。つまり，ゴットルが指摘したように，国民経済学において対象を理解する場合，いいかえれば体験された生起の連関，所為の連関の意味を追体験する場合には，研究者は常に，行為と思惟の前提となる日常知を誰でもが用いている。このことは，ゴットルの認識理論的前提であった。問題なのは，ここで用いている日常知が純化されず，無批判に用いられていることである。

ゴットルは現実それ自体は確かに秩序を有すものではあるけれども，それを丸ごと認識することは出来ず，体験された連関に入り込もうとするならば，つまりこれらの諸連関を推論しようとするならば，どうしても選択をせざるを得ないという。事実研究において用いられている日常知を反省し，再構成し，そこで加えられている選択を先取りしたものを，ゴットルは「事実の前の理論」と呼ぶ。それは「共通の経験」，国民経済学の取り扱う経験に基づいた理論であり，事実研究のための必要不可欠な選択を，日常の意味連関に加えたものだが，それによってより大きな恣意的な選択を避けることが出来る。

シュモラー(及びミル)が批判されるべきなのは歴史を研究したからではなくて，事実と理論の関係，従って，事実研究と理論研究の関係を取り違えたからである。シュモラーが想定したように，事実研究が理論構築のための素材蒐集にあたるのではない。事実研究＝経済史研究をおこなうこと自体は正しい。しかし，国民経済学における事実を理解する場合，つまり体験された生起の意味連関を追体験する場合には，研究者は常に，行為と思惟の前提となる日常知を誰でもが――純化しない形で――用いている。その誰でもが身につけている日常知を自己反省をとおして純化すること，これこそがゴットルが理論研究に対して与えた理解であり，またもっとも基礎的な経済理論の研究課題であった。

このように見てくると，この事実と理論の関係，即ち社会科学研究における理論の役割という点で，ヴェーバーとゴットルの類似点が指摘できよう。というのはヴェーバーは，歴史学派の代表者は現実を概念の体系＝理論に包摂することを科学の最終目的と考え，歴史研究をそのための素材蒐

(44) ゴットルの歴史学派及びシュモラーに対する評価は Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 609. や Gottl (1901), S. 147, 171 ; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 293, 324. を見よ。

集とみなしていると批判しているからである。このような立場に立つ者は，真なる科学を――人間事象を対象とする科学においても――法則科学と同一視し，科学の課題を法則の発見と事実の予測と同一視する科学観を持っている。この自然主義的立場がヴェーバーの批判対象の一つであったことは間違いがない。[45] この自然主義に基づく「法則科学」に対して，ヴェーバーは個性的現実，「歴史的個体」の認識を目指す「現実科学」を対置したのである。[46] 事実ヴェーバーが残した膨大な業績はそうしたものであった。

もう一つここで注意を払わねばならないことは，概念と概念の間及び概念の要素と要素の間の相互の依属関係である。国民経済学の根本概念として用いられている言葉は，何らかの一義的な対象を指示するものではなく，日常の意味連関――それは同時に行為の連関でもある――の中においてのみその意味と機能を得るものである，ということが「言葉の支配」へのゴットルの批判の骨子であった。さて，唯名論的立場に立つならば，例えば国家の概念を形成する場合，歴史上存在したありとあらゆる国家を観察し――ここであらかじめ何が国家かについての何らかのおぼろげな理解＝先行判断がなければ観察そのものが不可能なことに注意――そこから共通のメルクマールを取り出すことにより概念を形成することになる。このような観察は決して終わることはないし，そうであるが故にどうしても主観的ないし恣意的なものにならざるを得ない。経済学における根本概念をめぐる争いはまさにこの事態であった。概念が連関の中でのみ意味と機能を持つということは，概念同士が相互に関係づけられているということである。だから概念形成は孤立しておこなわれるのではなく，系列形成としておこなわれる。重要なのは概念が何を指示するかではなく，概念と概念の関係，概念と概念の間の意味連関である。

このようなゴットルの議論はヴェーバーの理念型の議論を想起させる。理念型はこれまで，模写

---

(45) フィヒテ以来のドイツ観念論や歴史法学派の業績，及び歴史派経済学が自然主義の進入に対する防波堤を築いたにもかかわらず、しかし部分的には歴史派経済学の仕事の結果，決定的な点で自然主義的観点が克服されないまま残っている，とヴェーバーは述べている。彼は経済学において理論的研究と歴史的研究が架橋されないまま対立しているのは，このためであるとも述べている。WL,186-87.（「客観性」99頁）

(46) 「我々が行わんとする社会科学は一つの現実科学である」(WL, 170.（「客観性」63頁）。この点については，Tennbruck, F., Die Wissenschaftslehre Max Webers, S. 380ff., in: Wagner, Gerhard und Heinz Zipprian, Hrsg., *Max Webers Wissenschaftslehre*, Ffm 1994. ゴットルもまた歴史科学を法則科学とみる見解に対して，「歴史法則」は「湿った火」のようなものだと批判している Gottl (1901), S. 119ff.; Gottl-Ottlilienfeid (1925), S. 256ff. これに対してロッシャーは次のように述べている。「我々は国民経済学説 Nationalökonomik の中で，国民経済学 Volkswirtschaftslehre を国民経済，即ち経済的な国民生活の発展法則に関する学説と理解する」(Roscher, W., System der Volkswirtschaft, 1. Bd., Grundlagen der Nationalökonomie, 17. Aufl., Stuttgart 1883, S. 33.)。「私は，人間の意図には基づかないが，より広い連関で説明可能な規則性を知覚するところでは，どこでも自然法則という」(Roscher (1883), S.30, Anm.4.)。また概念が最終目的ではなくて手段だというゴットルの見解は Gottl (1901), S. 146-7; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 291-3.

説の批判と合わせて，その主観性と道具性が強調されてきた。しかしこの点のみを強調すると，シュモラーらの唯名論の――ヴェーバーの批判対象の一つがシュモラーらであることを前提にして本稿では議論を展開してきた――立場との相違が不鮮明になってくる。[47]

ヴェーバーが求めたのは何よりも一義的に規定される鋭い概念であった。しかし，概念内容は無前提的な叙述によっても，共通のものを抽象し，総括することによっても一義的に規定されることはない。[48] そのようにしたところで概念が規定されないことを，我々は「根本概念をめぐる争い」を通じて知っている。それではヴェーバーはどのような方途をとるのだろうか。国民経済学の「根本概念」はどれも発生的な形式をとって，理念型としてのみ展開しうる，とヴェーバーはいう。[49] ヴェーバー自身が用いている例を使うならば，我々が都市経済の概念を構成する場合，それは「考察された全ての都市の中に事実として存在する経済諸原則の平均というようなものでは決してない」。[50] ここで鍵になるのは，この「発生的」という概念である。金井新二の整理によると，この「発生的」genetisch という語は，次の三つの意味がある。即ち，①「歴史的ないし因果的分析」②「再構成的認識」③「創造的解釈」の三つである。そしてヴェーバーは主に②の「再構成的認識」という意味でこの言葉を用いていた。[51]

それではこの再構成的認識とは何だろうか。アラーベックは，ヴェーバーが概念構成を行う場合に，二分法とその反復的適用が基礎になっているということを指摘している。[52] 例えば，「社会関係」

---

(47) 犬飼論文はヴェーバーの方法論において実体概念から関係概念への転換という契機を正当にも見出しながら，世紀転換期に議論された実体概念と関係概念という対立を中世以来の実在論と唯名論の対立と混同するという致命的な誤りを犯している。その結果は何度も繰り返され陳腐になった，しかし誤ったテーゼである。即ち，ヴェーバーが時代遅れであったドイツの社会科学をアングロサクソン化＝近代化した，と。

(48) WL, 193.（「客観性」113頁）。

(49) WL, 202.（「客観性」133頁）。

(50) WL, 191.（「客観性」107頁）。

(51) 金井によれば，「発生的」という言葉は通常の語法では①を想起させるが，ヴェーバーにおいては②が優勢であるという。しかし，氏はヴェーバーにおける認識の主観性と結びつけて③を強調する。しかし，これはヴェーバーのテキスト自体からは読みとることは出来ないと筆者は思う。また，ここでの議論では②が重要である。氏の指摘に従えば，また筆者が再確認したところによれば，①の意味のみで使用されているものではなく『科学論文集』の191，194頁中の二箇所，258頁の計四例では，二つの意味の優劣は判別しがたく，また，202頁中の二箇所，204頁，208頁，224頁，243頁の計六例では②の意味が優勢である（氏の258頁の例を重複してこの両方にあげているが，これは誤植か勘違いだと思われる。258頁には genetisch という語は一回しか使用されていないし，意味的には①も含まれているようなので，ここではこのようにした）。また『経済と社会』の第五版63頁では「経験的歴史的」（即ち①の意味）に対立する語として，「類型的発生的」という語は使われている。金井新二『ヴェーバーの宗教理論』東京大学出版会、1991年，44頁以下参照。

(52) Allerbeck,K., Zur Formalen Struktur einiger Kategorien der Verstehenden Soziologie, in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Jg. 34, 1982.

はまず，闘争的か友好的かで二分され，ついで闘争的な社会関係は形式的には友好的な「競争」と形式的にも闘争的な「闘争」に二分され，さらに競争は規則による競争と無秩序な競争に二分化される。また，友好的な社会関係も（目的合理的な）利益社会化と（目的合理的ではない）共同社会化に二分される。また，支配類型論の場合では，まず支配が日常的なもの（伝統的支配と合法的支配）か非日常的なもの（カリスマ的支配）かで二分され，さらに前者が伝統的か合理的かで二分される。アラーベックはさらに正統性の根拠や行為類型論にも同様の分析を試みている。ここでは，「比較→整理分類→類型化」という手順で類型概念が構成されるのではなく，この二分法が分析的な性質のものであるということを注意しなければならない。[53] つまり一定の分析観点に基づいて，一義的にAという概念を構築する際には必ず，その反対像としての非Aが生じる。つまり，ヴェーバーの二分法はこの結果生じるA／非Aの二分法なのである。[54] つまり，ヴェーバーは観察文をから概念を得るのではなく，一定の観点に基づいて一定の論理操作を反復することにより，概念の体系を得ているのである。いいかえれば，「外側から観察した結果，共通項でくくる意味での類型ではなく，個別的特性を内側から認識観点にかけて分別する」[55] ことで類型を得るのである。この概念間の意味連関の分析的性格に関して，ヴェーバーは次のように述べている。「「家計」の「定式」に関しては，……それは「適応」のような概念にひそんでいなかったものは明らかに何も含んでいない」。続けて「……ゴットルがオーストリア学派の合理的構成を押し進めたことを無価値だという意図はここでは全くない」。[56] ここで「合理的」とは「分析的」の意味で用いられている。ゴットルもまた，『言葉の支配』の第2論文「日常的なものの認識のための公式としての家計と企業」で一定の基本的な社会関係に一定の論理的操作を加えることにより，日常では多義的で曖昧なまま用いられている「家計」と「企業」という概念を，単なる類概念としてではなく，一義的に規定される概念即ち理念型，として導き出そうとしているのである。このような特質はロッシャーやシュモラーには見られない。例えば，ロッシャーは『国民経済の体系』の冒頭において，国民経済学の根本概念の出発点に人間を置きながらも，財・価値・財産・富・経済の順に論じている。[57] そこでは非常に様々な出典から，財を財たらしめるメルクマールは何だろうかという形で議論が行われる。その場合，概念規定の根拠は事実の観察に由来し，現実の観察から得られるメルクマールを列挙するというやり方がとられている。このやり方はシュモラーにおいても変わらない。シュモラーでも経験的事実が概念構成のために用いられている。[58] このように理解するならば，なぜ概念規定をした論文の冒頭で，ヴェーバーがゴッ

---

(53) 金井上掲53頁。

(54) とりわけそれが明瞭に現れるのが伝統的／合理的の二分法であろう。「伝統的」という概念はヴェーバーにおいては「合理的」の反対像を意味するのである。Allerbeck, S. 670. を見よ。

(55) 金井上掲59頁。

(56) WL, 117, Anm. 2.（「ロッシャー」241-2頁）。

(57) Roscher (1883), S. 1 ff.

トルの『言葉の支配』を指示したのかも，ゴットルのそこでの作業を「オーストリア学派の合理的構成の延長」と評価したのかも理解できよう。

もう一つヴェーバーの価値という新カント派のタームのために見逃されやすいのは，科学と行為の世界の日常知との関係である。[59] すでに述べたようにゴットルにおいて行為の世界とその日常知は日常における行為と思惟の前提であるのみならず，精神科学ないしは文化科学を遂行する上での必要条件でもあった。マイヤー論文の後半で，ヴェーバーは歴史的因果帰属を問題にし，歴史において結果の本質構成的要素とその規定因の間の因果関係を認識するのにはどうしたらよいかという問いをたてている。[60] そのために「可能性判断」，即ちある種の条件が加えられたり除外されたり変化した場合，結果にどのような変化が生じるのかについての判断が必要とされる。この可能性判断の際の論理操作[61]をヴェーバーは「法則論的知識の参照を意味する」と言い換えている。この法則論的知識はしばしば経験的諸規則と言い換えられている。この「法則論的知識」，即ち「経験的規則」ないしは「経験的知識」は従来一般概念・法則と同一視され，歴史研究・社会研究における一般概念・法則の使用を拒否する「本質直観」主義者に対するヴェーバーの批判と解釈されてきた。[62] しかし，それはヴェーバーによれば，単なる法則科学的知識よりも広い外延を持っている。というのは，経験的諸規則とは「特定の慣れ親しまれた経験的規則について，とりわけ人間が与えられた状況の下で如何に反応するのを常とするかの仕方についての知識」であり，[63]「自分自身の生活実践と他者の振る舞いについての知識から得られた」[64]ものなのであり，日常生活に由来するものなのである。[65] そ

(58) Schmoller,G., *Grundriß der allgemeinen Volkswirtschaftslehre*, Leipzig 1901-04, Bd. 1, S. 1-6.

(59) この論点は加藤がすでにその著者の第1章で述べている。

(60) WL, 273.（「マイヤー」186-7頁）。

(61) 理念型を構築する際にも全く同じ論理操作が行われる。WL, 192ff.（「客観性」111頁以下）

(62) その代表はシェルティングの解釈である。Schelting, A.v., Die logische Theorieder historischen Kulturwissenschaft von Max Weber und im besonderen sein Begriff des Idealtypus, in : *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 49. 1922.（石坂巌訳『ウェーバー社会科学の方法論』れんが書房新社，1977年。）この解釈はパーソーンズやヒューズにも受け継がれている。しかしながら，このように，ヴェーバーの理念型の議論を社会科学における「法則」や「一般概念」の使用と同一視する解釈は，以下の二つの問題を惹起する。第一に，ヴェーバーは理念型という用語で，純粋経済理論の体系や「権力」，「支配」，「合理的行為」等の「一般概念」のみならず，「中世都市経済」や「原始キリスト教」のような「個体概念」も含めていることの説明が出来なくなり，これをヴェーバーの混乱として処理せざるを得なくなってしまっている。第二に，ヴェーバー自身は因果性や因果法則を語る際にそれを，「カテゴリー」としての因果性と「自然法則」と「経験的法則ないし規則」のほぼ三つに分類し，とりわけ「シュタムラー論文」で明確に使い分けてシュタムラー批判を行っているにもかかわらず，今問題にしている解釈では，この三つが「一般法則」という名前のもとで一括して処理されてしまっている。

(63) WL, 276-7.（「マイヤー」192頁）。

(64) WL, 277.（「マイヤー」193頁）。

(65) WL, 356.（「シュタムラー」61頁）。

して例えば，知人と会ったときに帽子を取って挨拶しなければ無礼とみなされるとか[66]，学生組合の学生は無礼に対して特定の仕方で報復するとか[67]，いうタイプの知識も含まれるのであり，自然科学の意味での何らかの「法則」に還元されている必要はない[68]。いいかえれば，もしxならば，yという結果になるという定式化が出来る，行為についての知識を全般に指すのである。

またこの種の知識は合理的解明＝理解の前提ともなっている。なぜなら合理的解明とは次のことを意味するからである。即ち，現実の断片，とりわけ人間の挙動を，ある特定の行動がいかなる成果をもたらすのかを示す経験的規則の束に組み入れてみること，いいかえれば，ある現実の断片を，経験的規則を参照して手段を選択しながら所与の目的に達するという目的論的構造を持った行為（とその連鎖）として捉えることを意味するからである[69]。その際，行為者が身につけている経験的規則と観察者が有している経験的規則が近似すれば近似するほど，原則としてますます行為は目的論的なものとしておさえられるようになるであろう。そしてこのような経験的規則（の妥当）をあてに出来なければ，意図した成果のための手段の考量に基づくという意味での目的論的構造を持った「合理的」行為そのものがあり得ない[70]。そしてこの合理的解明という点でもヴェーバーは因果性に対する目的 Telos の正しいか論ずるに足るところのものはゴットルにより展開されている，といってゴットルを評価していた[71]。

このように見るならば，ヴェーバーにおいても前科学的日常知＝経験的規則が行為と理解の前提となっていることに気づく[72]。つまり，このような行為の知識である日常知が学問をいわば下部構造

---

(66) WL, 331.（「シュタムラー」41頁）。

(67) WL, 323.（「シュタムラー」34頁）。

(68) この点についてはヴェーバーは明確に「狭い精密自然科学的意味で「法則的な」連関」が問題になるのではないと述べている。WL, 179.（「客観性」83頁）。

(69) WL, 127ff.（「ロッシャー」259頁以下）。

(70) WL, 128.（「ロッシャー」260頁）。

(71) WL, 93, Anm. 1.（「ロッシャー」190頁）。行為の目的論的構造ということにゴットルが注目していることを我々はすでに知っている。なお，この「目的」が自然事象と人間の行為を区別するものであり，人間行為の理解可能性の前提となる。Gottl (1901), S. 76-7; Gottl-Ottlilienfeld (1925), S. 160-1.を見よ。

(72) 更にこうした「経験的規則」を参照しての「判断」も，歴史研究において用いられる判断は日常生活における判断とかわりはない（WL, 285-6.（「マイヤー」205頁））。

なおトレルチの以下の発言も参照せよ。「それら［＝抽象的歴史学的で，法則形成的・類型形成型諸学問］は、日々の生活の中で経験に従って獲得された解釈のカテゴリーとして，すでにあらゆる個々の事例になじまされたものであり，それだけで実践的な生活の方向づけを可能にするものを，学問的に展開したものである。……。ここで見出される一般の概念と法則は，あらゆる数学化可能性と概念必然性を欠いている限り，自然科学のそれとは根本的に区別される。それらは，流動している素材や幾千もの個性的個物に即して得られたものであり，それ故，――形式心理学から獲得されるいくつかの法則の例外として――法則というよりも，経験的規則というべきものである」(Troeltsch, E., *Der Historismus und seine Probleme*, 1961 Aalen, S. 62（近藤勝彦訳「歴史主義とその諸問題」『トレルチ著作集　第四巻』ヨルダン社，1980年，101頁）。

として支えているのである。ゴットルの「事実の前の理論」が日常の諸連関の知識を純化した「行為の理論」であることを考えるならば，ここでもヴェーバーとゴットルの類似点は指摘することが出来る。(73)

5．小　括

本稿が目的としたのは，ヴェーバーのゴットル評価を端緒として，ヴェーバーのゴットル理解と我々のヴェーバー像及びゴットル像の間の齟齬を修正することであった。そして，初期ゴットルの代表作である『言葉の支配』の分析を通じて，今まで明るみに出ることの少なかった初期ゴットルに光を当てる一方，そこで得られた成果をもとにして，ヴェーバー像の微修正が試みられた。初期ゴットルの著作もヴェーバーの方法論も世紀転換期における「実証主義への反逆」から理解されるのである。そこでは中立的な純粋観察に基づいた法則科学といった科学観が批判され，個性的な社会的歴史的現実を理解する現実科学といった科学観が提出された。同時に，その科学が日常＝行為の世界とその日常知という下部構造なしには，不可能であることが示された。

ゴットル自身は中期になるとヴェーバーとのより緊密な関係にたちながら，『言葉の支配』で展開した議論をより深めていくことになる。その際には，ヴェーバーの『ロッシャーとクニース』におけるヴェーバーのゴットルに対する批判が一つの契機となっている。けだし，ヴェーバーのゴットル批判の骨子は――近代主義的あるいは実証主義的ヴェーバー像に基づいた誤解のように――ゴットルが実証科学的でない，あるいは近代科学的でないという批判なのではなく，ゴットルが実証主義批判・自然主義批判を徹底していないという批判なのであるから。この点については別の機会に論じたい。

（経済学研究科博士課程）

参　考　文　献

Gottl, Fr., *Wertgedanke*, Jena 1897.
――, *Herrschaft des Wortes*, Jena 1901.
Gottl-Ottlilienfeld, Fr. v., *Wirtschaft als Leben*, Jena 1925.
――, *Wirtschaft und Wissenschaft*, 2Bde. Jena 1931.
――, *Volk, Staat, Wirtschaft, und Recht*, Berlin 1936.（金子弘訳『民族・国家・経済・法律』白揚社、1942年）
――, *Wirtschaftspolitik und Theorie*, Berlin 1939.

(73) Gottl-Ottlilienfeld(1925), S.518.

——, *Der Mythus der Planwirtschaft*, Jena 1932.（金子・利根川訳『計画経済の神話』理想社、1942年）

Weber, M., *Gesammelte Aufsäze zur Wissenschaftslehre*, 3. Aufl. hrsg. von J. Winckelmann, Tübingen 1968.

——, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 5. Aufl. hrsg. von J. Winckelmann, Tübingen 1972.

Max Weber-Gesamtausgabe, II/5.

Allerbeck, K., Zur formalen Struktur einiger Kategorien der Verstehenden Soziologie, in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Jg. 34, 1982.

Back, J., *Der Streit um die nationalöknomische Wertlehre, mit besonderer Berücksichtigung Gottls*, Jena 1926.

Brand, K., *Geschichte der deutschen Volkswirtschaftslehre*, Bd.2; Vom Historismus bis zur Neoklassik, Freiburg 1993.

Cassirer, E., *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*, Berlin 1923.（山本義隆訳『実体概念と関数概念』みすず書房，1979年）

Hansen, R., Der Methodenstreit in den Sozialwissenschaften Gustav Schmoller und Carl Menger, in: *Beiträge zur Entwicklung der Wissenschaftstheorie im 19. Jahrhundert*, hrsg. v. A. Diemer, Meisenheim am Glan 1968.

Hennis, W., *Max Webers Fragestellung. Studien zur Biographie des Werks*, Tübingen 1987.（雀部幸隆他訳『マックス・ヴェーバーの問題設定』恒星社厚生閣，1991年）

Hughes, H. S., *Consciousness and Society*, New York 1958.（生松・荒川訳『意識と社会』みすず書房，1970年）

Menger, C., *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der Politischen Oekonomie insbesondere*, Leipzig 1883.（福井・吉田訳・吉田改訳『経済学の方法』日本経済評論社，1986年）

——, *Irrthümer des Historismus in der deutschen Nationalökonomie*, Wien 1884, in : Carl Menger Gesammelte Werke, Bd. 3, 2. Aufl., Tübingen 1970.（吉田昇三訳「ドイツ経済学における歴史主義の誤謬」『経済学の方法』日本経済評論社，1986年所収）

Mill, J.S., *The System of Logic*, 2 vols. London 1872.（大関・小林訳『論理学体系』春秋社，1949-59年）

Mommsen, Wolfgang J. und Wolfgang Schwentker, Hrsg., *Max Weber und seine Zeitgenossen*, Göttingen 1987.（鈴木・米沢・嘉目訳『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』ミネルヴァ書房，1994年）

Oldenburug, U., *List- Knies- von Gottl-Ottlilienfeld*, Berlin 1936.

Parsons, T., *The Structure of Social Action*, vol. 2, 1937, New York 1968.（稲上・厚東・溝部訳『社会的行為の構造』第4・第5分冊，木鐸社，1989年）

Popper, K.R., *Objective Knowledge*, Oxford 1972.（森博訳『客観的知識』木鐸社，1974年）

Reyer, W., *Einführung in die Phänomenologie*, Leipzig 1926, reprinted NY, London 1980.

Rickert, H., *Der Gegenstand der Erkenntnis*, 2. Aufl., Tübingen 1904.（山内得立訳『認識の対象』岩波文庫，1927年）

——, *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung*, Tübingen 1896-1902, 1913.

——, *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, 1899.（豊川・佐竹訳『文化科学と自然科学』岩波文庫，1939年）

Riha, T., *German Political Economy*, Brandford 1985.（田村・内田・原田訳『ドイツ政治経済学』ミネルヴァ書房，1992年）。

Roscher, W., *System der Volkswirtschaft*, 1.Bd., Grundlagen der Nationalökonomie, 17.Aufl., Stuttgart

1883.
Schelting, A.v., Die logische Theorie der historischen Kulturwissenschaft von Max Weber und im besonderen sein Begriff des Idealtypus, in: *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 49, 1922.（石坂巌訳『ウェーバー社会科学の方法論』れんが書房新社，1977年）
Schmoller, G., Zur Methodologie der Staats- und Sozialwissenschaften, in: *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, N.F. Jg. 7, 1883.（吉田昇三訳「国家科学・社会科学の方法論のために」（抄訳）メンガー『経済学の方法』日本経済評論社，1986年所収）
——, Die Volkswirtschaft, die Volkswirtschaftslehre und ihre Methode, in : *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 1893, 3. Aufl., 1911, auch in : hrsg. v. August Skalweit, ffm 1949.（戸田武雄訳『国民経済，国民経済学及び方法』有斐閣，1938年）
——, *Grundriß der allgemeinen Volkswirtschaftslehre*, Leipzig 1901-04.
Schumpeter, J.A., *History of Economic Analysis*, London 1954.（東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店，1957年）
Tenbruck, F.H., Die Genesis der Methodologie Max Webers, in : *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 11. Jahrgang, 1959.（住谷・山田訳『マックス・ヴェーバー方法論の生成』未来社，1985年）
——, Das Werk Max Webers : Methodologie und Sozialwissenschaften, in : *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 38. Jahrgang, 1986.
——, Ein Diskussionsbeitrag? Erwiderung auf Gerhard Wagner und Heinz Zipprian, in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 39.Jahrgang, 1987.
——, Die Wissenschaftslehre Max Webers, in : Wagner, Gerhard und Heinz Zipprian, Hrsg., *Max Webers Wissenschaftslehre*, Ffm 1994.
Troeltsch, E., *Der Historismus und seine Probleme*, 1961 Aalen.（近藤勝彦訳「歴史主義とその諸問題」『トレルチ著作集　第四巻』ヨルダン社，1980年）
Wagner, Gerhard und Heinz Zipprian, Tenbruck, Weber und Wirklichkeit, in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 39. Jahrgang, 1987.
Wagner, Gerhard und Heinz Zipprian, Hrsg., *Max Webers Wissenschaftslehre*, Ffm 1994.
Weippert, G., Zur Theorie der zeitlosen Wirtschaft, in: *Jahrbuch für sozialwissenschaft*, Bd.12, 1961.
Weiß, J., *Max Webers Grundlegung der Soziologie*, München/ London/ New York/ Paris 1975, 1992.
Winch, P., *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, London 1958.（森川真規雄訳『社会科学の理念』新曜社，1977年）
Windelband, W., Geschichte und Naturwissenschaft, in: ders., *Präludien*, Bd. 2. 6. Aufl., Tübingen 1919.
Woll, H., *Die Wirtschaftslehre des deutschen Faschismus*, München, Wien 1988.

犬飼裕一「理念型の機能　ウェーバー社会科学論の基盤」現代社会理論研究会編『現代社会理論研究』3号。
——「ウェーバーの批判対象」『理想』654号。
奥田隆男「「ロッシャーとクニース」における理解論」『社会思想史研究』第10号，北樹出版，1986年。
加藤明彦『社会科学方法論序説—— M. ウェーバーと F.v. ゴットル——』風間書房，1991年。
金井新二『ウェーバーの宗教理論』東京大学出版会，1991年。
木本幸造「紹介・立野保男著『社会科学方法論研究』——ある M. ウェーバー批判・マルクス物神論・ゴットル労働概念」『経済学雑誌』大阪市立大学，1972年第4号。
九鬼一人『新カント学派の価値哲学』弘文堂，1989年。

酒枝義旗「ゴットル経済学研究序説――其の一わが国経済学界との関係について」『早稲田大学政治経済学雑誌』第103号，1950年。
――― 「『価値想』――ゴットル経済学研究(2)――」『早稲田大学政治経済学雑誌』第106号，1950年。
――― 『生活の学としての経済学』前野書店，1981年
田村信一『グスタフ・シュモラー研究』御茶ノ水書房，1993年。
中野泰雄「ウェーバーとゴットル――社会学と全経済学――」『亜細亜大学経済学部紀要』第6号。
早坂忠「戦時期の経済学」経済学史学会編『日本の経済学――日本人の経済的思惟の軌跡――』東洋経済新報社，1984年。
福井孝治『生としての経済』甲文堂書店，1936年。
――― 『経済学の基礎にあるもの』東京出版，1958年。
八木紀一郎『オーストリア経済思想史研究』名古屋大学出版会，1988年。